翻　　訳

ジュール・ヴェルヌ

気球に乗って 24 分

三　枝　大　修　　訳

訳者序言

1873 年 9 月 28 日の日曜日に，北フランスの街アミアンのロングヴィル広場で気球祭りが開催された。百戦錬磨の気球飛行士ウジェーヌ・ゴダールの操縦するメテオール号が，アミアン在住の作家ジュール・ヴェルヌを含む乗客 3 名と猿 1 匹とを乗せて空へと舞い上がっていく……。これが，その 10 年ほど前に，まさしく気球による旅の物語によって一躍出版界の注目を集める存在となったこの小説家にとっての —— やや意外なことに —— 生涯で唯一の気球搭乗体験であったと推定されている。そして，ヴェルヌがそのときの所感を綴った文章が，ここに訳出する「気球に乗って 24 分」である。初出は 1873 年 9 月 29 日・30 日付「アミアン新聞」[1)]。ただし，この段階ではまだタイトルが定まっていたわけではなく，ヴェルヌの文章はローカルニュース記事「メテオール号の飛行」の一部をなしていたという[2)]。編集長テオドール・ジュネ宛の手紙，という体裁をとって

1）　« Chronique locale. Ascension du Météore », *Journal d'Amiens - Moniteur de la Somme*, nº 5109, 29 et 30 septembre 1873, p. 1-2.

2）　Volker Dehs, « Les ballons de Jules Verne », in Jules Verne, *Un Voyage en ballon*, Amiens, La Maison de Jules Verne, 2001, p. 9.

書かれたこの体験談が，同じ年の年末[3]，たった 12 ページの薄い小冊子[4]として出版されたときに初めて「気球に乗って 24 分」というタイトルは出現する。言うまでもなく，1863 年に発表されたヴェルヌの出世作，『気球に乗って 5 週間』のもじりである。

残念ながら，当時の「アミアン新聞」もこの小冊子もいまでは稀覯の資料となっており，訳者はまだ現物を目にしたことがない。そのため，本稿では Jules Verne, « Vingt-quatre minutes en ballon », *Textes oubliés*, éd. Francis Lacassin, Paris, UGE, coll. « 10/18 », 1979, p. 191-195 を翻訳の底本とし，これを他の近代版のテクスト[5]と全文照合することで本文の校訂に努めた（照合の結果，二つのテクストのあいだに特筆すべき異同は見つからなかった）。

ごく短いテクストなので，すでに日本国内の雑誌等で翻訳・紹介されたことがある可能性は排除しきれないが，管見のかぎりでは，以下が「気球に乗って 24 分」の本邦初訳である。やや詳しめの註を付けてお届けする。

3）　Piero Gondolo della Riva, *Bibliographie analytique de toutes les œuvres de Jules Verne*, Paris, Société Jules Verne, t. I, 1977, p. 40 を参照。
4）　Jules Verne, *Vingt-quatre minutes en ballon*, Amiens, T. Jeunet, s. d. [1873], 12 p.
5）　Jules Verne, « Vingt-quatre minutes en ballon », in *Un Voyage en ballon*, *op. cit.*, p. 49-58.

親愛なるジュネ[6]様,

ご所望されていた，メテオール号[7]の旅についてのいくばくかの覚え書きをお届けいたします。

どのような条件のもとでこの飛行が行われようとしていたかは，ご存じのとおりです。容積 900 立方メートル，ゴンドラと操作具込みで重量 270 キログラムという小ぶりな気球を，照明にはうってつけでもまさにそのせいで月並な上昇力しかもたないガスで膨らまし，そこに 4 人が乗りこむ予定でした。気球乗りのウジェーヌ・ゴダール[8]と 3 人の旅客，つまり弁護士のドベルリ氏[9]，第 14 戦列[10]の中尉であるメルソン氏，それから私です。

いざ出発，という段になっても，全員を持ちあげることができません。メルソン氏はすでにナントでウジェーヌ・ゴダールとの軽航空機[11]での飛行を体験済みだったため，無念そうではありましたが，私と同じく人生初の空中遠足に臨もうとしていたドベルリ氏に席を譲ってくれました。あとはお決まりの「ロープを放せ」の声が発せられるのを待つばかり，私たちはいまにも地面を離れようとしていました……。

6） テオドール・ジュネ (Théodore Jeunet, 1822-1882)。日刊紙「アミアン新聞」の編集長。ヴェルヌの友人。

7） 「メテオール (météore)」はフランス語で「流星」の意。語源的には「空の高み」を含意する。

8） ウジェーヌ・ゴダール (Eugène Godard, 1827-1890)。フランスの気球飛行士。生涯の飛行回数は 2,500 を超える。

9） アルベール・ドベルリ (Albert Deberly, 1844-1888)。アミアン生まれの弁護士。アミアン・アカデミー会員。1885 年からは国民議会議員。

10） 原語は「14e de ligne」。「第 14 戦列歩兵連隊 (14e régiment d'infanterie de ligne)」の略。

11） 「軽航空機 (aérostat)」は，気球，飛行船など，空気よりも軽い気体を用いて空中に浮く航空機の総称。この文章では「気球」を言い換えている。

ところが，ウジェーヌ・ゴダールの息子さん[12]を勘定に入れていなかったのです。この大胆不敵な 9 歳の坊やがゴンドラをよじ登ってきたので，彼のために砂袋（バラスト）四つのうち，二つを犠牲にしなければなりませんでした。残るは二袋のみ！　ウジェーヌ・ゴダールといえど，こんな状態で空を飛んだことは一度もありません。というわけで，飛行が長時間に及ぶ可能性はなくなりました[13]。

ゆっくりと，斜めに，私たちは 5 時 24 分に出発しました[14]。南東の方角へと風に運ばれ[15]，空は清澄無比でした。地平線上に少し雷雲が出ているくらいです。猿のジャックがパラシュートで飛びおりてくれたおかげで[16]，さらに速く上昇することができ，5 時 28 分には高度 800 メートルを飛んでいました。高度はアネロイド気圧計[17]で測ったものです。

街の眺めは素晴らしいものでした。ロングヴィル広場[18]は，赤と黒の蟻のひしめく蟻の巣のようでした[19]。赤が軍人，黒が民間人です。大聖堂[20]

12）父と同名のこの少年 (Eugène-Pierre-Gabriel Godard, 1864-1910) は，のちに父と同じく気球飛行士になり，「ウジェーヌ・ゴダール 2 世」と呼ばれることになる。

13）ガス気球は，捨てられるおもりがなくなると，たとえガスが残っていたとしても自力ではそれ以上高度を上げることができなくなる。

14）日中は陽光を受けて地表が温まり，上昇気流が生じて機体の上昇・下降が不安定になるため，気球による飛行は，通常，早朝や夕方に行われる。

15）偏西風の影響か。ヴェルヌが執筆した地理学書『フランスおよびその植民地の図解地理』にも「〔ソム県で〕支配的なのは西，北西，南西から吹く風である」という記述がある (Jules Verne, *Géographie illustrée de la France et de ses colonies*, Paris, J. Hetzel, coll. « Bibliothèque d'éducation », 1867, p. 666)。

16）猿のジャックによるパラシュート降下は，この日の祭りの出し物の一つとして開催一週間前（1873 年 9 月 21 日付）の「アミアン新聞」のローカルニュース欄でも予告されていた。後掲の「参考資料 1」を参照のこと。

17）気圧計の一種。薄い金属でできた真空の箱が気圧の変化に応じて膨らんだりへこんだりする動きを指針に伝え，気圧を示すようにしたもの。水銀気圧計に比して精度は劣るが，小型かつ堅牢であるため携帯に適している。高度計としても使用される。

18）この日の気球祭りの会場であり，メテオール号の出発地点となった広場。現在，この広場の一画にはジュール・ヴェルヌの名を冠するサーカス場 (Cirque Jules Verne) が建つ。

19）下方に見える群集を虫（とりわけ蟻）に喩えるのはもちろんクリシェである。

の尖塔が徐々に低くなり，まるで指針のように上昇の度合いを示してくれていました。

気球の中にいると，水平的なものであれ，垂直的なものであれ，何の動きも感じられません。地平線はつねに同じ高さに保たれているように見えます。半径が増していますが，ただそれだけなのです。一方，ゴンドラの下では，大地が漏斗のようにへこんでいます[21)]。と同時に，絶対的な静寂，大気の完全な静けさを，私たちを運ぶ籐の軋みだけが乱しています。

5 時 32 分，西の地平線にのしかかる雲から陽光が射し，気球をつつく —— するとガスが膨張し，おもりの砂を捨てたわけでもないのに，私たちは 1,200 メートルの高さまで運ばれていきます[22)]。この旅行中に到達した最大高度です。

まなざしに触れるものを以下に挙げていきましょう。足下には，サン＝タシュール[23)]とその黒ずんで見えるいくつもの庭 —— どれも，オペラグ

ヴェルヌ自身，1851 年の初期短篇「気球旅行」の登場人物の一人にこんな台詞を言わせている。「高度 800 メートル！　人間がまるで虫けらみたいだ！〔…〕コメディ広場が巨大な蟻の巣と化しているぞ」(Jules Verne, « Un voyage en ballon » [1851], in *Bulletin de la Société Jules Verne*, nº 177, août 2011, p. 56)。

20） 13 世紀に建てられたアミアンのノートル＝ダム大聖堂のこと。ゴシック様式の大聖堂としてはフランス最大の規模（容積約 20 万立方メートル）を誇る。1981 年からはユネスコの世界遺産。

21） ヴェルヌが評論「エドガー・ポオとその作品」(1864) の中で言及しているエドガー・アラン・ポオの短篇「軽気球夢譚」(1844) にも，高度 25000 フィートを飛行中の気球からは眼下の海が「絶対的かつ完全に凹状に見える」という記述がある（ヴェルヌが読んでいたシャルル・ボードレール訳のフランス語テクストでは「la mer [...] semble absolument et entièrement concave」）。また，1877 年のヴェルヌ自身の作品『エクトール・セルヴァダック』第 2 部第 19 章の末尾にも，気球のゴンドラから見た大地を「漏斗」に喩えた以下のような一文がある。「大地は彗星の下で，巨大な漏斗のようにへこんで見えた」(Jules Verne, *Hector Servadac*, Paris, J. Hetzel, coll. « Les Voyages extraordinaires », 1877, p. 388-389)。「気球に乗って 24 分」，『エクトール・セルヴァダック』のいずれにおいても「大地 (la terre)」，「漏斗のように (comme un entonnoir)」，「へこむ (se creuser)」と同一の語彙・表現が用いられている以上，この一文はヴェルヌによる自己引用とみなすこともできよう。

22） 温度が上昇してガスの体積が増えると，気球の浮力も増大する。

ラスを逆向きに覗いたときのように縮こまっています。ぺしゃんこになった大聖堂 —— ちょうど，尖塔が街のいちばんはずれの家々と混ざり合っています。ソム川 —— ほっそりと輝く，一本のリボン[24]。鉄道 —— 烏口（からすぐち）で引いた，何本かの線。街路 —— 曲がりくねる，幾本もの紐[25]。湿地菜園（オルティヨナージュ）[26] —— 野菜売りの，簡素な商品陳列台。畑地 —— 往時の仕立屋たちが軒先に吊しておいた，色とりどりの生地見本の図[27]。アミアン —— 灰色がかった，小さな立方体の山。まるで，ニュルンベルクのおもちゃ[28]の箱を野原にぶちまけたかのようなのです。それから，サン＝フュ

23）アミアンの街の南東部にあるサン＝タシュール地区のことか。この地区にはサン＝タシュール遺跡，サン＝タシュール修道院という二つの史跡がある。前者はアシュール石器が発見された 19 世紀半ば以降，考古学の分野で注目を集めてきた（現在は「サン＝タシュール考古学公園」となり，一般に公開されている）。後者はフランス革命期（1790 年）に廃されたが，その敷地・建物は王政復古後にイエズス会の学校として使用され，ヴェルヌもこれを『フランスおよびその植民地の図解地理』の中でアミアンの史跡の一つに数えている (Verne, *Géographie illustrée de la France et de ses colonies*, *op. cit*., p. 669)。現在は同じ場所にサン＝タシュール教会が残り，隣接する敷地・建物も私立の学校として使われている。

24）「気球旅行」(1851) にも川を「リボン (ruban)」に喩えた以下のような一節がある。「ライン川は川幅が広く，リボンを繰り延べたようだった」(Verne, « Un voyage en ballon », art. cit., p. 63)。

25）『気球に乗って 5 週間』第 13 章にも道を「紐 (lacets)」に喩えた以下のような一節がある。「〔高度 6,000 ピエ（＝ 1,950 メートル）から見下ろすと，〕街道は紐に，湖は池になる」(Jules Verne, *Cinq semaines en ballon*, Paris, J. Hetzel, coll. « Hetzel », 1863, p. 91)。

26）「湿地菜園」と訳した「hortillonnages」は，ソム川沿いの湿地帯に作られた野菜畑のこと。無数の細い水路で縦横に区切られている。古典ラテン語の「hortus」（庭）の指小辞である後期ラテン語の「hortellus」（小さな庭）が語源。

27）『気球に乗って 5 週間』第 12 章にも畑地を「生地見本 (échantillons)」に喩えた以下のような一節がある。「畑地はさまざまな色の生地見本のように見えた」(Verne, *Cinq semaines en ballon*, *op. cit*., p. 75)。

28）中世から近代にかけて，南ドイツの街ニュルンベルクは玩具産業の一大中心地だった（現在も「ニュルンベルク国際玩具見本市」が毎年開催されている）。ヴェルヌの 1886 年の作品『征服者ロビュール』の第 7 章でも，オタワにある議事堂が「ニュルンベルクのおもちゃ (joujou de Nuremberg)」に喩えられている (Jules Verne, *Robur-le-Conquérant*, Paris, J. Hetzel, coll. « Les Voyages extraordinaires », 1886, p. 69)。

シアン，ヴィレル＝ブルトヌー，ラ・ヌヴィル，ボーヴ，カモン，ロンゴーといった周辺の村々[29)]。いずれも，ひどく大がかりなマカダム舗装工事をするために，あちこちにうずたかく積み上げられた小石の山のようです。

すると，軽航空機の内部が明るくなりました。いつもウジェーヌ・ゴダールが開けっ放しにしている下部の通気筒から覗きこんでみると，中は澄んだ明るさ。そこにメテオール号の，黄色と茶色が交互に並ぶ肋（リブ）が浮きあがっています。色にせよ，匂いにせよ，ガスの存在を示すものは何もありません。

そうこうしているうちに，高度が下がっていきます。私たちが重いからです。高度を保つには，おもりを捨てなければなりません。外に放り出された何千枚ものチラシが，高度の低い方にもっと強い気流があることを示しています。目の前には，ロンゴー。しかし，ロンゴーの手前には溝状の沼が連なっています。

「この沼地に降りるの？」とウジェーヌ・ゴダールに訊いてみると，

「いや」とのお返事。「おもりがもうないんだったら，俺の旅行鞄を投げ捨てるよ。この沼地は絶対に越えなくちゃね」

なおも高度は下がっています。5 時 43 分，地上 500 メートルのところで強風につかまりました。工場の煙突の上を通るときは，その底へと視線が潜っていきます。一種の蜃気楼現象で，溝にたまっている水に気球が映ります。蟻人間たちが大きくなり，道を走っています。二本の鉄道線路のあいだ，その分岐点の手前に，小さな草地が見えます。

「で，どうするの？」と私。

「どうするかって？　あの線路は越える，その向こうにある村も越えて

29）アミアンから見て気球の進行方向にあたる南東方面の村の名前が列挙されている（原語はそれぞれ「Saint-Fuscien」「Villers-Bretonneux」「La Neuville」「Boves」「Camon」「Longueau」）。アミアン周辺の地理については「参考資料 2」の地図（後掲）も参照のこと。なお，アミアンの中心部からロンゴーまでの距離は約 5km，最も遠いヴィレル＝ブルトヌーまでの距離は約 16km。

いく！」とウジェーヌ・ゴダール。

強風。木々の揺れでそれが分かります。ラ・ヌヴィルを横切りました。前方には原っぱ。ウジェーヌ・ゴダールが誘導索（ガイドロープ）[30] という長さ 150 メートルのロープを，それから錨を投下します。5 時 47 分，その錨が地面を打ちます。何度か，排気弁を開閉[31]。とても親切な野次馬連が駆けつけて誘導索（ガイドロープ）をつかんでくれたおかげで，私たちは少しの衝撃も受けることなく穏やかに着地します。気球が鎮座したその様子は，溌剌たる太った鳥のようであり，翼に散弾を受けた狩りの獲物のようには見えません。

20 分もすると，気球はガスを抜かれ，丸められ，梱包され，荷車に積みこまれていました。そして，一台の馬車が，私たちをアミアンへと連れ帰る最中でした。

以上が，親愛なるジュネ様，手短ではありますが，正確なる印象記です。付け加えておけば，単なる空中散歩はもちろんのこと，軽航空機での長旅でさえ，ウジェーヌ・ゴダールの指揮下であれば，決して危険に見舞われることはありません。豪胆で頭の回転が速く，経験豊富で冷静沈着，新旧両世界ですでに 1,000 回を超える飛行を果たしているこの男[32]，ウジェーヌ・ゴダールは，何一つ偶然任せにすることがないのです。彼にとってはすべてが想定済みです。どんな偶然の出来事も，彼を驚かせることはできません。どこへ行き，どこに降りることになるか，熟知しているのです。

30）気球が地面に近づいたときなどに機体から垂らし，高度の調節を行うためのロープ。このロープの接地部分が増えれば増えるほど —— すなわち，ゴンドラから外にこのロープを繰り出せば繰り出すほど —— 機体にかかる荷重は減り，気球は浮力を得る。

31）排気弁を開けると球皮内部のガスが外に放出され，気球を降下させることができる。

32）ヴェルヌが参加したこのときの飛行は，ゴダールにとっては通算 1,055 回目だった。なお，「新旧両世界」はヴェルヌがしばしば用いる表現であり，「旧世界」は大航海時代以前にヨーロッパ人に知られていた土地，すなわちヨーロッパ，アジア，アフリカを，「新世界」は南北アメリカ大陸とオセアニアを指す。

驚嘆すべき眼力で，彼は気球を停めるべき場所を選定します。片手には気圧計を，もう片手には砂袋（バラスト）を持ち，数学的厳密さをもって事を進めていきます。機材はどれも見事に整備されています。排気弁の操作に迷いはなく，球皮が折り重なることも決してありません。「破砕用ロープ」[33]がありますから，万が一，気球が地面をかすめ，即座にガスを抜いて着陸しなければならない，というようなときでも，必要とあらば軽航空機を切り裂くことができます。ウジェーヌ・ゴダールは，その経験値，冷静さ，鋭い判断力のおかげで，彼を支え，運んでくれる空気の，まさに支配者なのです。ですから，ご存じのように，他のどんな気球乗りであれ，彼には及びません。こういった条件下であれば，空の旅も絶対に安全です。それはもはや旅ですらなく，夢のような何か —— ただし，決まって短すぎるものでしかありえない，夢のような何かなのです！

草々

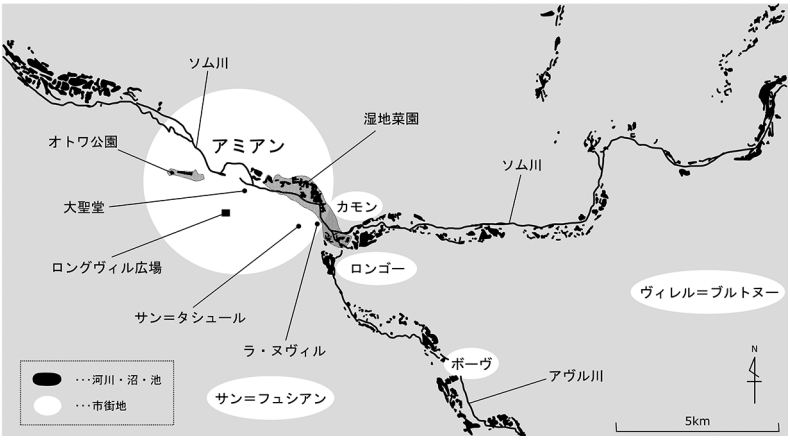
ジュール・ヴェルヌ

33）非常時用のロープ。これを引くと球皮の一部が裂け，ガスが一気に抜けて緊急着陸することができる。

［参考資料 1］1873 年 9 月 21 日付「アミアン新聞」に掲載された気球祭りの予告

本紙はゴダール氏（ウジェーヌ）から次のような案内を受け取っている。9 月 28 日の日曜日に，天候が許せば，アミアンのロングヴィル広場で大規模な気球祭りが開催される。気球飛行士と乗客たちの飛行に加えて，袋競走，滑稽騎馬パレード，空中の水差し，ポーランド・シャワー等々が行われる。気球小船隊，猿のジャックによるパラシュート降下，吹奏楽のコンサートが，この祭りに華を添えるだろう。―― 入場料は手頃な金額となる見込み[34)]。

［参考資料 2］　アミアンとその周辺の地図



34）« Chronique locale. Ascension de 1873 », *Journal d'Amiens – Moniteur de la Somme*, nº 5102, 21 septembre 1873, p. 2 ; rééd. dans Jules Verne, *Un Voyage en ballon*, *op. cit.*, p. 49. なお，「袋競走」というのは大きな袋で下半身を包みこみ，脚が自由に動かせない状態で飛び跳ねながら競走を行う競技のことだが，「空中の水差し」「ポーランド・シャワー」等，その他の余興は詳細不明なものが多い。

「気球に乗って 24 分」の余白に —— 訳者あとがきに代えて

2019 年 —— コロナ禍の始まる前年 —— の 8 月 22 日から 27 日にかけて，訳者はアミアンに滞在していた。その折に撮った写真，いくつかの場所の印象記などをここに掲載し，「気球に乗って 24 分」を読むためのささやかな参考資料としたい。ヴェルヌが後半生の 34 年間 (1871～1905) を過ごしたこの街の情景が少しでも身近に感じられるようになれば幸いである。

1）ロングヴィル広場とサーカス場

ヴェルヌの乗った気球の出発点，ロングヴィル広場は，アミアン中心街の南端にある。1845 年に稜堡の跡地に造られたというこの場所は，以後数十年のあいだ，「サン＝ジャンの定期市」（中世以来の長い伝統をもつアミアンの祭り）や観兵式の会場になっていたというが[35]，いまではその敷地の一辺が交通量の多い車道になってしまっているせいか，はたまた少なからぬ面積が駐車用のスペースに充てられているせいか，自動車ばかりが目について風情に乏しい。

そんな中，かろうじてこの空間にいくばくかの華やぎをもたらしているのが広場の中央に鎮座するサーカス場である（**写真 1**）。エミール・リキエ[36]の設計になるこの建物は，「アミアン市営サーカス場」として 1889 年にオープンし，2003 年の改装を機に「ジュール・ヴェルヌ・サーカス場 (Cirque Jules Verne)」へとその名を変えた。この改称，街にゆかりのある「有名人」の威光を借りようとしただけのようにも見えるが，必ずしもそうではない。というのも，1889 年 6 月 23 日の落成式においてこのサーカ

35） Olivier Bondois, « Henriville à l'époque de Jules Verne », *Revue Jules Verne*, nº 4, 1997, p. 64.

36） エミール・リキエ (Émile Ricquier, 1846-1906)。アミアン生まれの建築家。1892 年からはアミアン・アカデミー会員。

写真 1　サーカス場

ス場の完成を祝い，その存在意義について力説するスピーチ[37]を行ったのが，誰あろう，ジュール・ヴェルヌだったからだ（小説家はその前年の選挙に当選してアミアン市議会議員となり，市の教育・文化事業等を担う「第 4 委員会」の副委員長を務めていた）。生涯唯一の気球搭乗体験と，サーカス場の落成式での演説 —— ロングヴィル広場とヴェルヌとの縁は，それなりに深いのである。

なお，この広場から「ジュール・ヴェルヌ大通り (Boulevard Jules Verne)」を東へ歩いていくと，5 分ほどで「ジュール・ヴェルヌの家 (Maison de Jules Verne)」に到着する。1882 年から 1900 年までの 18 年間，作家が賃借人として住んでいた家である。塔のある風変わりな建物だが，現在は記念館として整備され，一般に公開されている（**写真 2**）。

37）　Jules Verne, « Inauguration du Cirque Municipal d'Amiens », *Textes oubliés*, Paris, UGE, coll. « 10/18 », 1979, p. 293-304.

写真 2　ジュール・ヴェルヌの家

2）アミアンのノートル＝ダム大聖堂

「気球に乗って 24 分」の中に二度言及されるアミアンのノートル＝ダム大聖堂は，「フランス最大の」としばしば形容されるだけあって，本当に大きい。とりわけ横から —— 街の北側から —— 見ると，ヴォリューム感が強調されてマンモスのようである（**写真 3**）。今も昔もアミアン最大の名所であり，ヴェルヌも当然のことながら『フランスおよびその植民地の図解地理』の中で，この大聖堂を街の史跡の筆頭に挙げている[38)]。ちなみに日本の観光ガイド，『地球の歩き方　フランス』を開いてみても，アミアンの「おもな見どころ」欄に掲載されているのはこの大聖堂のみである[39)]。

38）Verne, *Géographie illustrée de la France et de ses colonies*, *op. cit.*, p. 669.
39）『地球の歩き方　フランス』（2020～2021 年度版），ダイヤモンド・ビッグ社，2019 年，279 頁。

写真 3　アミアンの大聖堂

訪問の際には聖堂の中をぐるりと巡るのみならず，ぜひとも有料の塔に登っておきたい。「南の塔」（1372 年完成，高さ 61 メートル。**写真 5** の右側の塔）を途中まで登ってから，外壁沿い，バラ窓の下にしつらえられた歩廊（ギャラリー）を通って，「北の塔」（1402 年完成，高さ 66 メートル。**写真 5** の左側の塔）へ。ついで，薄暗い螺旋階段をさらに登り，塔のてっぺんまで出れば，アミアン市街の爽快なパノラマが足の疲れを吹き飛ばしてくれる。「気球に乗って 24 分」の中で言及されている「尖塔」（1533 年完成，高さ 112 メー

写真 4　大聖堂の尖塔

写真 5　大聖堂のファサード

トル）も，そこからであればかなり間近に眺めることができる（**写真 4**。なお，この写真はヴェルヌを乗せた気球の進行方向，すなわち南東向きに撮られたものであり，画面左に湿地菜園（オルティヨナージュ），遠景にロンゴーが写っている）。

大聖堂の前には，さほど広くはないが，どことなく瀟洒な雰囲気の漂う石畳の広場があり，その隅にカフェのテラス席が設けられている。せっかくなので腰を下ろし，ダージリンか何かを飲みながら大聖堂の立派なファサード（**写真 5**）を眺めていると，ウェイターのおじさんが親切にも店の名物だという「アミアン風マカロン」をおまけに付けてくれた。「ジャン・トロニュー (Jean Trogneux)」という名前のその店，場所が場所だけにてっきり土産物屋を兼ねた単なる観光客向けのカフェだろうと思いこんでいたが，さにあらず —— あとで調べてみたら，1872 年創業のこの老舗洋菓子店こそが現大統領夫人ブリジット・マクロンの実家なのだという（本店はカフェから徒歩数分の別の場所）。

写真 6　ソム川

写真 7　沼

3）ソム川と湿地菜園（オルティヨナージュ）

アミアンとその一帯には水があふれている。メテオール号の乗客も，「ソム川」，「湿地菜園（オルティヨナージュ）」，「溝状の沼」を眼下に認めていたが，そういった河川・沼沢地がいまなおこの地に独特の彩りを与えている（**写真 6・写真 7**）。

例えば，アミアンの中心街を出発し，ソム川沿いの散歩道を ―― ヴェルヌの気球の進路に倣って ―― 東の方角へと歩いてみる。「曳舟道 (Chemin de Halage)」という名前のその小道を 4km ほど行けば，隣町ロンゴーの入り口にさしかかったあたりでいくつか大きめの池が見えてくる。ヴェルヌがフライトの終盤で目にした「沼地」の名残だろうか。

「曳舟道」の両側に広がるのはアミアンの名所の一つ，湿地菜園（オルティヨナージュ）だ。細い水路（**写真 8**）の張りめぐらされたこの泥炭質の土地で，かつてはニンジン，キャベツ，ポロネギ等の栽培が大規模に行われていたようだが，20 世紀に入ると都市開発の影響もあって，その面積は減少の一途をたどり，いまでは専業の野菜栽培業者（オルティヨン）の数はごくわずかであるという[40]。たしかに

40）ソム県（県庁所在地はアミアン）の公式サイトの一つ「Somme Tourisme」によると，現在，野菜栽培業者（オルティヨン）は 7 人のみだという（https://www.somme-tourisme.com/amiens-et-autres-histoires/les-hortillonnages-dedale-de-jardins-sur-leau, 閲覧日：2021 年 10 月 20 日）。

写真 8　湿地菜園の水路

写真 9　湿地菜園の中の庭園

湿地菜園（オルティヨナージュ）の外周を散歩していても，野菜を育てている「菜園」よりは花々の咲き乱れる観賞用の「庭園」の方が目立つ印象がある（**写真 9**）。いまでは 300 ヘクタールを残すのみだという湿地菜園（オルティヨナージュ）は，どちらかといえば環境保護の，あるいはエコツーリズムの対象なのである（訳者が訪れたときも，平底のボートで水路をめぐる有料のガイド付きツアーが大人気だった）。

4）熱気球祭り

なんとも嬉しい想定外だった —— アミアン到着の初日に観光案内所で何気なく手に取ったフライヤーの一つに，こんな言葉が印字されていた。「熱気球祭り（モンゴルフィアード）」。「オトワ公園にて無料のショー」[41]。「ジュール・ヴェルヌの気球が帰ってくる……」。

「熱気球祭り (montgolfiade)」という単語は初めて見たが，「熱気球 (montgolfière)」からの造語なのだろう。離陸は 8 月 24 日（土）と 25 日（日）の 2 日間，それぞれ 7 時と 19 時に行われるという。滞在期間中にばっちり見に行けてしまうではないか。

というわけで，8 月 25 日の夕方の開始時刻に間に合うようにイヴェント会場へと向かう。サマータイムが適用されている夏のフランスの日没時

41）　オトワ公園 (Parc de la Hotoie) はアミアンで最古かつ最大級の公園。中心街の西に位置し，敷地面積は約 20 ヘクタール。

写真 10　熱気球祭り

刻は遅いので，19 時前後だと空はまだ明るく，気温も高い。だだっ広い公園に，1,500 人くらいいただろうか。なかなかの人出である。約 150 年前，1873 年 9 月 28 日の気球祭りには 4,000 人が集まったというが[42]，これだけ娯楽が多様化し，スペクタクルが大型化した 21 世紀の現代にあってもなお気球のフライトは集客力を保っているのだ —— オトワ公園に陸続と打ち寄せる見物客の波を眺めながら，そんなことを思った。

イヴェントは 19 時から 19 時半までの，おおよそ 30 分間。熱気球 4 基が次々とふくらみ，青空に吸いこまれていった（**写真 10**）。中空に浮かぶ気球のシェイプが美しく，しばし見とれてしまう。熱せられた空気とナイロン球皮のかたちづくる，自然な丸み。いちばん形が似ているのは，イチジクだろうか。あるいは，鮮度抜群ではちきれそうな，ブドウの粒か。

42）　フォルカー・デース『ジュール・ヴェルヌ伝』石橋正孝訳，水声社，2014 年，278 頁。

……と，そんなことを考えているうちに，気球はどれも豆粒のように小さくなっていく。そして，おそらくは 150 年前のメテオール号もまたそうであったように，東へ，東へと，どこかためらいがちに流されていく。

［付記］

本稿に掲載されている写真はすべて訳者が撮影したものです。「参考資料 2」の地図も —— あいにく 19 世紀の適当な地図が見つからなかったため，現代の地図しか参照できませんでしたが —— 訳者が製作しています。